

LSC NEWS LETTER

Learning Support Center 広島修道大学
学習支援センター

2022 No.36

広島修道大学
Hiroshima Shudo University

Contents

アクティブ・ラーニングと主体的な学び… 1 初年次教育セミナーについて… 2
 学習支援に対する学習アドバイザーの思い… 4 第75回 LSC ドキュメンタリー・アワー開催報告… 6
 LSC 資料紹介… 7 <学び★サブリ>まずは4分間・英語多読マラソン… 8

アクティブ・ラーニングと主体的な学び

○ 学習支援センター次長 木村 和美

近年、アクティブ・ラーニングに取り組む大学は増加しています。ベネッセ教育総合研究所(2022)の「第4回大学生の学習・生活実態調査」(2021年実施)によると、大学ではディスカッション、グループワーク、プレゼンテーション等の活動を取り入れた授業が多くなっており、学生がアクティブ・ラーニング型の授業を受ける機会は増えているといえます。しかし一方で、学生の大学教育観では「単位を楽に取れる授業がよい」、「学習方法は授業で指導を受けるのがよい」が増加しており、依存的な傾向が強まっています。

このような傾向は、「第3回大学生の学習・生活実態調査」(2016年実施)においてすでに表れていました。大阪大学の川嶋教授(2018、pp.15-16)は、「現在大学や大学教員が提供しているアクティブ・ラーニングの機会が、真に学生の自発的な活動ではなく、(中略)全てが大学と大学教員がお膳立てをした『受動的アクティブ・ラーニング』になっているからではないか」と指摘しています。アクティブ・ラーニングというと、上述したようなグループワーク等の活動を思い浮かべる人が多いと思います。もちろん、これらは有効なアクティブ・ラーニングの方法です。しかし、はたしてそれだけなのでしょうか。小学校、中学校、高等学校ではアクティブ・ラーニングの視点を生かした授業改善による「主体的・対話的で深い学び」の実現が目指されています。この「主体的な学び」という言葉の中には、「学ぶことに興味や関心を持つ」、「自己のキャリア形成の方向性と関連付ける」、「見通しをもつ」、「粘り強く取り組む」、「自己の学習活動を振り返って次につなげる」といった学習者の学びの姿が含まれています。それに対して、授業者の授業改善の視点としては「既習事項を振り返る」、「具

体物を提示して引きつける」、「子供が自らめあてをつかむようにする」、「その日の学びを振り返る」等、様々なことが考えられます(国立教育政策研究所 2020)。形式的にアクティブ・ラーニングを取り入れるだけでは、学生の主体的な学びにはつながらないのです。「授業改善のためのアクティブ・ラーニング」という本来の役割を忘れてはいけないということです。

また、今日の学生が依存的な傾向にあるということですが、コロナ禍の影響もあり人間関係や経済面等での不安や悩みによって、誰かに助けてほしいという切実な状況に置かれているとも考えられます。実際、「第4回大学生の学習・生活実態調査」では、大学が提供する支援・相談体制を利用する学生の割合は高まっています。「今どきの学生は…」と嘆くのではなく、その背景にある様々な生きづらさや困りごとに寄り添いながら、主体的に学ぶ力を育成していく必要があるのだと思います。

【参考文献】

ベネッセ教育総合研究所(2022)「第4回大学生の学習・生活実態調査データ集」
https://berd.benesse.jp/up_images/research/4_daigaku_chousa_all.pdf (最終閲覧2023年2月1日)
 川嶋太津夫(2018)「教育改革の四半世紀と学生の変化」
 ベネッセ教育総合研究所『第3回大学生の学習・生活実態調査報告書』pp.7-16.
https://berd.benesse.jp/up_images/research/000_daigaku_sei_all.pdf (最終閲覧2023年2月1日)
 国立教育政策研究所(2020)「主体的・対話的で深い学びを実現する授業改善の視点について」
https://www.nier.go.jp/05_kenkyu_seika/pdf_seika/r02/r020603-01.pdf (最終閲覧2023年2月1日)

初年次教育セミナー

初年次教育セミナーについて

学習支援センター 富永 あゆみ

学習支援センターは、2005年4月1日に設置され、同年9月1日から本格的業務を開始した。設置の目的は、「学習支援センターは、本学学生及び入学予定者に対する学習支援、学習相談並びに教育方法の企画・開発に係る支援・研究等の業務を推進し、本学の教育活動の充実に資することを目的とする。」(広島修道大学学習支援センター規程第2条)とあり、その目的を達成するための学習支援センターの3つの使命として、①在学生に対する学習支援プログラムの実施及び学習相談 ②入学予定者の入学準備学習プログラムの実施 ③教育方法の企画・開発に係る支援・研究を掲げて、日々業務を行っている。

その3つの柱のうちの一つ、③教育方法の企画・開発に係る支援・研究のために、2008年度より、FD研修の一環として、本学教職員対象の「初年次教育セミナー」を開催している。

本セミナーの目的は、初年次教育の意義や学生を主体的な学びにいざなう教育手法、授業の工夫などを提案することであり、主に知識伝達型ではない授業の運営を効果的に進め、より教育方法の技術的改善に踏み込んだ内容のFD・SD研修会となっている。年度ごとに統一テーマを掲げ、そのテーマに沿った講師を学内外から招聘し、より効果的な内容となるよう講師と綿密な打ち合わせをしながら個別のテーマを決めている。新型コロナウイルス感染が拡大した2020年度を除き、年1～3回程度開催し、これまで通算37回のセミナーを開催している。

直近5年間のテーマは、学生の学びの思考を促し、そのためにどのような授業設計、授業構築が有効かを学ぶテーマとなっており、学生一人ひとりが、自らの課題に向き合い、主体的に学ぶ力を身につけるための工夫や授業スキルなどに重点が置かれている。

また、過去37回の初年次教育セミナーを大きくテーマ別に分けると、授業の構築・手法(アクティブラーニング、グループワーク含む)に関するテーマ:15回、学生の学び・思考、その可視化に関するテーマ:10回、初年次教育に関するテーマ:8回、その他、包括的学習支援やカリキュラムデザインなどのテーマに分かれる。そのうち、30名以上にご参加いただいたテーマは、授業の構築・手法(アクティブラーニング、グループワーク含む)に関するテーマ:6回、初年次教育に関するテーマ:5回、学生の学び・思考、その可視化に関するテーマ:2回、その他、カリキュラムデザイン、教材開発に関するテーマなどで、特に授業の構

築・手法などが興味のあるテーマであったことが伺える。

しかし、近年特に、参加者の伸び悩みは大きな課題の一つであるため、できるだけ多くの教職員の皆様に興味をもってご参加いただき、有効に活用できる内容となるよう過去のテーマや講師などを検証し、今後も継続してセミナーを実施していきたいと考える。

第36回のテーマ・内容については、「2022年度の部局事業計画」にある「数学の苦手な学生の支援体制構築のための検討」の参考とするために講師とテーマを選定した。崇城大学の大島康裕先生は、崇城大学の学習支援体制「SALC」の設立の経緯や数学・物理分野等のSALC組織の仕組みなどに精通しておられ、学生ファシリテーターの育成と課題、学習支援の中で有効なアドバイジングスキルなどにも詳しく、次年度から予定している数学の苦手な学生のための学習ピアの運営や育成の検討に大いに役立つと思われる。

また、第37回のテーマ・内容については、2021年に「障害者差別解消法」が改正され、私立大学においても合理的配慮は法的義務となり、これを受けて多くの大学で学生支援の体制強化が喫緊の課題となっているという現状を踏まえ、「包括的学習者支援と合理的配慮」をテーマに掲げ、立命館大学 OIC 学生オフィス障害学生支援室の学習支援コーディネーターであるヒューバート真由美先生に講師をお願いした。本学においても2024年までに対応すべく、「障がい学生支援体制整備のためのワーキンググループ」から本学の現状と検討事項をまとめた報告書が提出された時期であり、立命館大学の、教学部における学修支援施策と学生部が所管する専門職による支援部門(カウンセリング部門、学修支援部門、障害学生支援部門、保健センター)のコーディネート機能による学生のニーズに繋ぐ仕組み作りや取り組み、授業配慮の合理性の判断が困難な精神・発達障害の学生への支援や、多様なニーズを持つ学生への教学部と学生部が連携する学修支援などの事例を用いた講演は大いに役立つものであった。

今年度(第36回・第37回)の初年次教育セミナー参加者による感想をご寄稿いただいたので(次ページに掲載)、参加者のご意見なども参考に、今後もできるだけ多くの教職員の皆様に参加していただけるようなテーマ・講師選定を行い、学習支援センターの3つの使命のうちの一つである「教育方法の企画・開発に係る支援・研究」の達成へとつなげていきたいと考える。

第36回 初年次教育セミナー に参加して

参加者
からの声

人文学部 木村 恵子

今年度の初年次教育セミナーは、崇城大学総合教育センターの大嶋先生による「学習支援の場で学生の学びを促す」の演題で実施された。大嶋先生は崇城大学総合教育センターで学生の授業内容理解を促す大学授業改善や学生の学習支援に関わっておられる。これまで、数学の基礎学力を調査するプレースメントテストの導入や習熟度別クラスでの授業展開など学生が専門科目を学ぶために必要な数学の基礎学力を獲得させるための初年次の指導プログラムの構築や実践に取り組んでこられた。

本セミナーでは、教員の授業改善や初年次教育システムのように教員ができる指導改善に加えて、学生個人の学びを支える効果的な学習支援として、学生ファシリテーターを用いた学習支援体制の構築と組織化、具体的なファシリテーター養成のプログラムとしての研修講座の例を紹介された。崇城大学では学生支援の方法としてこのシステムが取り入れられている。大学生による学習支援は、支援対象とされる学生に目が向きがちだが、支援する学生側のメリットも大きい。例えば、数学のファシリテーターは、相手が納得する理解を得られずにいるところを探り、体系的な知識を自由にたどり、支援している学生と共に解決への道を探したり、示したりする。支援を必要とする学生にわかるように数学を教えるので、支援される学生の学力向上を図ることができる。同時に、支援する学生自身の数学学力の向上にもつながる。

今回紹介されたファシリテーター養成研修の内容は、どの科目内容でも必要な学生ファシリテーターのアドバイジングスキルを学ぶ研修である。崇城大学ではアドバイジングスキルブックを作成しており、実際に学習支援を始める前の人間関係の構築の仕方から指導している。学習支援をする学生は学習内容に入る前にどのようなことを支援スキルとして知っておく必要があるのかを学ぶことができるので、相手に必要な支援内容をどのようにうまく相手に伝えればよいのかを知った上で支援をすることができる。

学習者を支える学習支援学生の育成プログラムを活用するにあたって、崇城大学の数学科では、専門教育に必要な数学の学習内容を教員が精査した上で、学生間の学び合いを促す学習支援体制をつくり、学生ファシリテーターにアドバイジングスキルを研修させて、学習支援に当たらせている。このように、学生による学生のための学習支援体制の構築に関して、具体的な内容を聞くことができ大変有意義なセミナーであった。

第37回 初年次教育セミナー を聞いて

参加者
からの声

学生センター次長 平岡 健

4月に学生センターに異動し、障がい学生支援体制整備を進めることが課題として提示され、ワーキンググループを作成し、資料等を説明する中で本学の現状を理解するとともに他大学の最先端の取組事例を資料の中で検証してきた。

しかし、コロナ禍ということもあり他大学調査等を実施できず資料中心の検証となったため今回立命館大学の障害学生支援室の取組を学生支援コーディネーターから直接伺うことができたことは大変ありがたかった。

講演の中においては、発達障害を抱える学生の増加、学生、教職員の気付きを繋ぎ、コーディネートを行う人の大切さ、一人一人の学生支援のPDCAと大学全体のPDCAサイクルの大切さについての説明が記憶に残った。

今回の説明を受けて本学の学生センターは、組織として保健室と相談室を備えているので障害学生支援を行うコーディネーター機能も学生センターで担うことにより、効果的に学生支援ができる可能性が高くなることが理解できた。

具体的には、専門職である看護師、臨床心理士のアドバイスを身近に受けながら障害学生支援が実施できる点が利点であるが、学生が本当に支援をしてほしいのは、講義時の合理的配慮であり各教員との連携がもっとも大切な業務となる。

この業務は、大学全体としての障害学生支援への全体像を決定し、より望ましい方向性を求めて改善をしていくみをつくるだけでなく、履修時に教員に対して学生の症状と配慮依頼内容を伝えるだけではなく望ましい対応方法を知っておき、学生や教員の不安を少しでも解消しながら個々の学生にとってより望ましい障害学生支援を目指す必要がある。

立命館大学は、専門職として学生支援コーディネーターを職員として複数人雇用し看護師、臨床心理士と同様に学内で位置づけることによって多くの関係者に働きかけることができる立場を与え、専門職の話し合いの中で多くの知見を得るとともに、障害学生を支援する学生への取組も実施し学生スタッフの成長にむすびつけていると感じることができた。また、講演の中で、新しい職種であり最先端を走る誇りと業務の楽しみを感じさせてくれ、学園全体のビジョンの中での業務を意識し、フェーズごとに結論をだしながら組織の再編をおこない次のステージに進めている姿勢に感銘をうけた。

また、本学における問題点は他大学も同様であり、大学の中でのコストのかけかたにより人的資源をどのように振り向けていくかで大学としての真価が問われると思う。

学習支援に対する学習アドバイザーの思い

学習支援センターでは、学生が主体的に学ぶ力を身に付けられるよう、様々な学習支援を行っています。日頃から学生一人一人に向き合い、学びをサポートしている学習アドバイザー3名の思いを、ここで紹介します。

3つの学習支援の紹介

学習支援センターでは、大学での学びをサポートするものとして、学習相談やワークショップ、スタディグループなどで学びの機会を提供しています。

●学習相談

大学の学びに関する個別の相談です。学びの「何かうまくいかない」の解決の糸口を、学習アドバイザーと一緒に考えていきます。

●ワークショップ

大学に必要なスタディスキル全般や英語学習についての講座です。勉強に不安を感じている人も、学びを深めたい人も、ワークを通して体験的に学べます。

●スタディグループ

学びに関してテーマを1つ決めて学ぶ、グループ学習です。学年学科を問わず、定期的にみんなで学べます。学生の自発的なグループ学習も支援しています。

学習アドバイザー 谷岡 亮

英語の学習相談の多くは TOEIC 対策、授業のサポートですが、その他にも留学を目指す学生の TOEFL スコアの取得や英検、課外活動の英語のスピーチの練習など多岐にわたります。まずは学生と相談しながらその学生にあった勉強法、学習スケジュールを考えることから始め、目標達成を目指します。スピーチの練習など短期に集中してサポートが必要なものを除き、その後は基本的に1週間に1度のペースで学習進捗の確認をし、学習のアドバイスとわからなかった問題などの解説を行います。学習を通して、短時間でもいいので継続的に学習する習慣を身に付けること、自分に合った語学の学び方を見つけてもらえるように意識しています。TOEIC で800点以上取れた、英語の成績が A だったなど学生と目標達成を共有できることはとても嬉しいことです。

スタディグループでは TOEIC の問題演習と新聞やニュースを読む時事英語を行いました。学習相談とは違って、数人のグループで勉強をするので、学生同士の会話なども促しながら、TOEIC の問題演習や時事英語の特徴や語彙を勉強しています。スタディグループの良いところは学部異なる学生同士と一緒に学ぶことができる点で、少人数なのでお互いに話しやすく学部、学科を超えて、意見や大学の情報などを交換できることに大きな意義があると思います。

今年は1年間を通し8つのワークショップを行いました。大きく TOEIC 対策、多読関連、ビジネス英語に関連したものです。毎年、学生に役立ち、また知見を広めることができるということを重視して内容を決めています。TOEIC に関しては多くの就職活動前にスコアを取得する必要があることから、年度初めの4月に TOEIC のガイダンスから始まり、その後はリスニング、リーディングセクションのパートごとに対策する内容を行いました。多読に関しては年度初めに多読の楽しみ方と学習支援センターでも実施している英語多読マラソンについて紹介しています。ビジネス英語に関しては昨年の自己紹介、自社紹介に続き、ビジネス email の基本を学んでももらいました。こうした機会がさらなる学びのきっかけになってほしいと思っています。

学生の声

私は苦手な英語を克服する為に学習支援センターで勉強を始めました。初めは英語が苦手なこともあり英語の授業の予習、復習を中心に、2年生になってからは空いた時間で TOEIC の問題を解き、週に1度細かく解説していただくことで、英語を勉強する習慣を作っています。また大学生活での不安や悩みも相談できるので、とても学生に寄り添った場所であると思います。
(福原 拓実さん 法律学科)

学習アドバイザー 齋藤 佳子

日本語アドバイザーとして支援に携わる中で、私は、学生が自分の言葉で考えられるようになることを意識しています。読み書きは大学での学びの基盤となるので、考えたことを言語化することに慣れてほしいという考えからです。

例えば、スタディグループとワークショップでは、読み書きを通じた言語化の練習の場を設けるようにしています。スタディグループでは、昨年は「レポート読み書きトレーニング」と銘打ったスタディグループを開催しました。短いレポートを読み、目的や答えを理解した上で、自分の考えを参加者同士で交換してもらいました。さらに、レポートならではの言い回しを見つけ、それらの表現を用いて、簡単なレポートを書くことに取り組みました。今年度は「意見文を書こう」というスタディグループで、新聞記事を読んで意見交換をしてから意見文を書き、何度も推敲を繰り返していくという取り組みを実施しました。これらのスタディグループでは、まずインプットの機会を設けることで、語彙や言い回し、構成のパターンを蓄え、アウトプットに活かすことを狙っています。

ワークショップでは、レポートの書き方に関連するものが多いですが、書評を書くワークショップも開催しています。短い小説を読んでもらい、それに対する自分の考えを、三部構成で書いてもらいます。小説という親しみやすいテキストを用いて、自分が得た情報に対し、自分は何を考えたのか、それはなぜなのかを書き表す練習をします。このような自分の内面を探る行為は、専門の学びにおいても考えを深める練習になるのではないのでしょうか。

学習相談では、課題に関する相談や、時間管理の相談に対応します。いずれの場合においても、こちらが先回りして教えるのではなく、学生に質問をし、学生が自分の言葉で考えられるようになることを目指しています。時間がかかり、時に回り道になることもありますが、いつかは自分ひとりで自分の考えを言葉にしていかなければならないのですから、必要な過程だと思います。

学生の声

私は一年生の夏休みから「意見文を書こう」というスタディグループに参加しました。参加したきっかけは自分に文章や意見文、レポートを書く力が足りていないと感じたからです。このスタディグループで自分の意見に説得力を持たせるための書き方や、伝えたいことに一貫性を持たせることが大切だということが分かり、授業課題のレポートで実践できるようになりました。大学生活で役立つことばかりなので皆さんもぜひ参加してみてください。

(八山 裕一さん 経済情報学科)

学習アドバイザー 宮原 千咲

自律的な学習者を育てるという観点から、対話を重視した支援を行っています。対話は、自身の考えを整理でき、さらに、他者から気づきも得られ、思考が促進されると考えるからです。

学習相談では、学生に話してもらい、こちらは質問し、問題の整理を手伝っています。話すことで、自身の状況や考えていることが明確になるようです。学生の困りごとを聞くと、自身の考えややるべきことが整理できていないことが原因になっていることが少なくありません。そこで、対話を通じた考えの整理、状況把握をした上で、解決したい物事との距離を理解し、自身がやるべきこと、自身に合った方法を見つけられるよう支援しています。

また、担当するスタディグループでは、日本語や思考法に関するテーマを扱いました。日本語も言語の一つと捉え、誰に、どんな場面で、何を伝えたいかを想定し、適切な表現を参加者で考えます。また、思考法では、皆さんが普段やっていることの延長として、「根拠をもって考える」「多角的な視点から」の考え方を扱いました。これらの内容は、答えが1つに限られるものではありません。学部学科・学年を越えて他者と話し合い、交流しながら、より適切な答えを一緒に考える場として、グループ学習を行いました。

個別相談やグループ学習のハードルが高い人は、まずワークショップに参加してみてください。大学で学ぶ上でまず身に着けたほうが良い学びのスキルや知識をテーマにしています。例えば、前期においては1年生向けに、知っておいた方が良いレポートの基本を、そして、後期にはレポートの詳細な書き方として、レポートで使える引用方法などを扱いました。講座中にてできるだけワークや活動を取り入れています。参加し学習支援センターで学ぶことのハードルを下げてもらえたらうれしいです。

このように、対話を通じた気づきを捉え、学生自身の挑戦を支援しています。学生自身が自分のやりたいことや、すべきことに取り組めるよう成長を見守っていきたいと思います。

学生の声

学習相談では、先生とは別の視点でアドバイスをもらい、学びに取り入れていきました。学習アドバイザーと話すことで、自分の状況を客観的に見ることができ、すべきことを整理できたのが特に良かったです。また、課題が進まない時も努力を受け止めてもらったり、自分に合うやり方を一緒に考えたりしたので、モチベーションを維持できました。学習についてはもちろん些細な質問も気軽にでき、雑談も交えながらの相談なので、毎回利用が楽しみでした。

(馬場 真樹也さん 教育学科)

第75回

LSC ドキュメンタリー・アワー開催報告

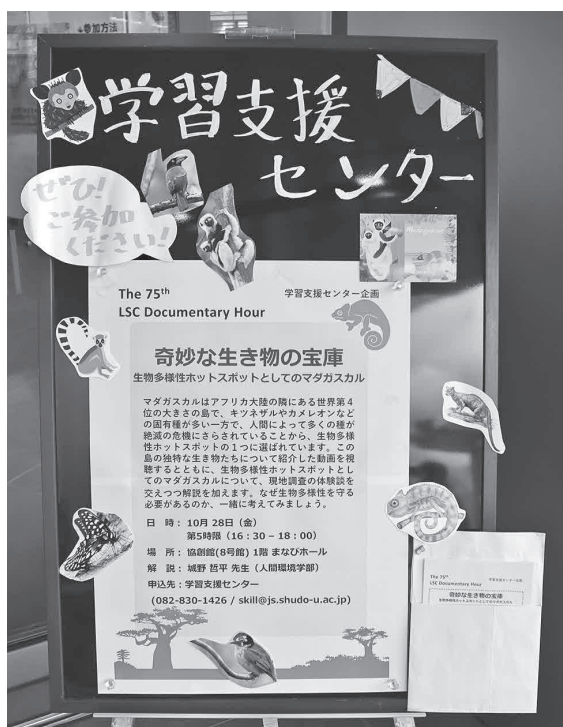
LSC ドキュメンタリー・アワーとは、本学の教員が自ら選んだドキュメンタリー映像を、教員の解説と共に視聴する企画です。授業とは異なる教員の問題に対するアプローチに触れられる機会になっています。

「奇妙な生き物の宝庫：生物多様性ホットスポットとしてのマダガスカル」

人間環境学部准教授 城野 哲平

今回は、生物多様性ホットスポットとしてのマダガスカルの生物多様性とその進化について、そしてその生物多様性が現在どのくらい危機的な状況にあるのかについて、自身の研究についての話を踏まえて解説しました。生物多様性ホットスポットとは、固有種の割合が高い一方で、人間によって改変され危機的状況を迎えている生態系を有する地域を指す言葉です。講演では、まずなぜ固有種が進化するのか、そしてなぜ多くの種が共存できるのかという2つの問い掛けを行い、高い固有種割合が進化するメカニズムについて簡単に説明しました。その後、『NHKスペシャル ホットスポット 最後の楽園 ①「マダガスカル 太古の生命が宿る島」』を視聴し、キツネザルやカメレオンなど、マダガスカルで進化した固有種について知ってもらいました。続けて、固有種同士の間で進化したユニークな生物間相互作用の一例として、自身が研究していたマダガスカルに住むアリとヘビの特殊な種間関係について紹介しました。

間に東京都の1.3倍の面積に相当する2,850km²の森林が失われたというデータもあるほどですが、その要因としては、人口増加と政情不安のあおりを受けた貧しい人々による違法伐採が大きいと考えられており、また満足に食べられない人々による密猟は森林に住む生物の数を急速に減らしています。マダガスカルで見られるユニークな生態系は、観光資源として活用することで、違法伐採や密猟によって消費してしまうよりはるかに大きな価値を生み出すはずですが、それにもかかわらず、貴重な生物多様性を食いつぶしてしまう勢いで消費してしまっている、今のマダガスカルの人々のことを、愚かだと思いませんか？ニホンウナギやアサリなどの水産資源を過剰に消費し絶滅に追いやりつつある私たち日本人の振る舞いと、実は似たところもあるのではないのでしょうか。人間と自然をあたかも二項対立のように捉えて、人間社会を発展させるためには自然破壊は致し方がないとする意見もありますが、実際には人間も生物多様性の恩恵を受けることで生活が成り立っています。短期的には自然資源を浪費して社会を発展させることができても、長期的にみれば、生物多様性の喪失は人間社会の衰退を招くであろうことは明らかです。本企画のテイクホーム・メッセージは、生物多様性の保全は、実は我々の社会を守ることと同義である、というものでした。私たちにとって望ましい、生物多様性との付き合い方について考えるきっかけになればと思います。



本企画でご紹介したマダガスカルの生物多様性は、近年急速に失われつつあります。2005年から2010年までの5年





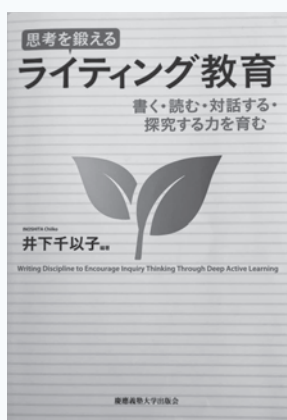
LSC 資料紹介

学習アドバイザー 齋藤 佳子

学習支援センターでは、大学教育、初年次教育、アクティブラーニングや授業手法などに関する図書を集めています。教職員には貸出もおこなっていますので、気軽に学習支援センター(協創館1階)までお問い合わせください。

思考を鍛えるライティング教育

——書く・読む・対話する・探求する力を育む



本書の題にも用いられている「思考を鍛えるライティング教育」では、書くこととは、「ことばで思考し認識するという内的な知的行為」を「文章として具現化する力」とであると捉えます。「思考を鍛えるライティング教育」は、「変革期を生きる人間形成の基本となる、教養ある「自律した書き手」の育成」を目指して、4部構成15章で構成される本書では、「思考を鍛えるライティング教育」の、「実践と理論の両面から具体的な方策」が幅広く示されています。

「思考を鍛えるライティング教育」の枠組みは、基礎力、ディシプリン、教養の三層から成ります。基礎力とは、書く力や読む力、対話する力などです。批判的思考力や論理的表現力などの力がディシプリンに該当し、思考の核となります。さらに、メタ認知により自己を相対化する教養が「考えて書くという行為を包括的に捉え、方向づける」力として位置づけられます。考えたことをただ書くだけでなく、メタ認知により自身の書きたいことを省察し、自ら調節することまでを「思考を鍛えるライティング教育」の射程に入れます。これにより、本書が目的と

する「変革期を生きる人間形成の基本となる、教養ある「自律した書き手」の育成」を目指すのです。上記の枠組みで「自律した書き手」を育てるには、メタ認知的気づきを育むような学習環境を作れるかが鍵となります。本書では、メタ認知的気づきを育むために、「知識叙述型ライティング」と「知識変換型ライティング」の2種類に分けた段階的なライティングの学びとテーマ設定の重要性が指摘されています。

井下千以子編著(2022)／慶応義塾大学出版会

する「変革期を生きる人間形成の基本となる、教養ある「自律した書き手」の育成」を目指すのです。

上記の枠組みで「自律した書き手」を育てるには、メタ認知的気づきを育むような学習環境を作れるかが鍵となります。本書では、メタ認知的気づきを育むために、「知識叙述型ライティング」と「知識変換型ライティング」の2種類に分けた段階的なライティングの学びとテーマ設定の重要性が指摘されています。

段階的なライティングでは、まず基礎的な「知識叙述型ライティング」で、与えられたテーマについて思いついたまま書き、修辭的な問題を自ら修正することで、既習知識を生かしたメタ認知を促します。次に、「知識変換型ライティング」で、「何についてどう書くか」を考えさせます。目的に照らし合わせて内容を吟味し、文章の誤りの修正にとどまらず、知識の再構成をさせることで、既習知識をそのまま応用するよりも複雑で創造的なメタ認知的気づきを促すことができると考えます。

さらに、何を書かせるのかという点も、メタ認知的気づきを促すことにつながります。学習者が関心を持って、なおかつ難易度の高すぎない論題を与えることで学習者が思考を深めるきっかけになるのです。

本書の各部を見ると、第1部「考える・書く・読む・対話する力」を鍛えるライティング教育、第2部 高大接続～大社接続に資するライティング教育、第3部 正課と正課外教育をつなぐライティングセンター、第4部 思考を鍛えるライティング教育の未来と、ライティング教育に対し、多面的にアプローチしていることがわかります。前述したような枠組みや理論を実践に落とし込む上で、本書の幅広い実践報告や研究が、実際的な助けとなるのではないのでしょうか。

<学び★サプリ>

2022 Vol. 23

まずは4分間

学習アドバイザー 宮原千咲

「やらなきゃいけないとわかっているのに、なかなか課題に取り組めない」という時、ありませんか？

もしかしたら、それは完成までの工程が多かったり、負担が重い、また、大きな目標を達成させたいときによく起きるのかもしれませんが。そんなときは、段取りを整え、行動の計画を立てることをお勧めしています。そうすると、やるべきことが明確になり、取り組みの見通しが立てられ、進めやすくなります。

しかし、「ちょっとしたことで、面倒くさくなって後回しにしてしまう…」「何からすべきかもわからない…」という人もいないのでしょうか。それは、「すべき」というストレスや、あまりわからないことを進めなければならないストレスが邪魔をしているのかもしれませんが。

そんな人には、まず数分間でも取り組んでみることを、お勧めします。皆さんの中にも、「課題に取り組み始めたら、思ったより早く終わる」という人もいないのではな

いかと思います。この現象は、ズーニンが提唱した「ズーニンの法則」または「初動の4分間」と言います。何かを始めるときに、最初の4分間でうまくスタートを切れば、その後もうまく進められるというものです。もちろん、数分間の取り組みは、完成させたい物事に対して必要なことをします。周辺の物事、例えば、試験勉強を始める前に部屋の掃除をするなどでは、事は進みません。短時間でもすべきことを行うことで、先を進めていく道が作れるのではないかと思います。「すべき」というストレスを軽減し、さらに、やってみたことで見通しが立たないことをする不安感を減少させ、前向きに取り組んでいけるでしょう。

よろしければ、一つの方法として、まずは4分間しっかり取り組んでみてください。賛否はあると思いますが、いろいろな方法を試し、自分に合った方法を見つけていけるといいかなと思います。

<学び★サプリ>はまなびコモンズ掲示板でも読むことができます。

英語多読マラソン 学習アドバイザー 谷岡 亮

学習支援センターでは人文学部のロナルド先生、経済科学部の岡田先生、図書館と協力し英語多読マラソンを実施、運営しています。多読マラソンとはフルマラソンの42.195kmにかけて英語のGraded readers（英語を学習者のレベルによって書かれた本）を421,950words読むというものです。学生は図書館で本を借りるか、学習支援センターのまなびコモンズにある多読コーナーにて本を読み、読んだ語数1万語ごとにスタンプを押してもらい、コースの完走を目指します。

英語の本を読むということは難しく大変なことではないかという印象を受けるかもしれませんが、Graded readersという英語の本は学習者のレベルごとに英語を合わせて書かれていますので、学生は自分のレベルにあったものを選び、読むことが可能です。また、多読マラソンは①原則辞書を引かない、②わからないところは飛ばす。③つまらなければ終了、次の本へ、という3つのルールのもとに行うので学生も気軽に多読を進めることが可能です。

多読のメリットはいくつかありますが、英文を読むスピードが速くなる、英語を学習する時間が増え、総合的な英語力のアップにつながるなどの報告があります。多く

の学生が就職活動時にTOEICを受けますが、TOEICのPart 7では膨大な量のリーディングがあり、速読に慣れていないとその文章量に圧倒されてしまいます。多読を行うことで、段階的に速読に慣れることが可能です。さらに、シェイクスピアやジェイン・オースティンなど初級者ではなかなか読むことが難しい小説も初級者のレベルの英語に合わせて書き直されている本もあるので、著名な英文学作品に気楽に触れることができるメリットもあります。

多読マラソンは随時学習支援センターにて申し込みが可能です。どなたでも参加が可能ですので、興味がある方の参加お待ちしております。

学生の声

私が多読マラソンを始めたきっかけは、多読ワークショップに参加し、英語を読めるようになりたいと思うようになったことです。また、図書館の英語リーダーズコーナーには多くの本があり面白そうと思ったことです。普段、時間の余裕があるときなどに、マイペースに読んでいます。多読をされていてよと思ったことの一つに、「読めた」が積み重なって、長い文章でも「読めるかも」とポジティブに考えられるようになったことです。（山田 美織さん 教育学科）

